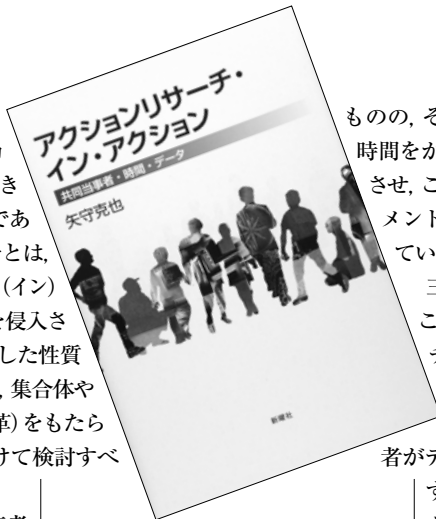


本書は、京都大学防災研究所に勤める著者が、アクションリサーチにおいて検討すべき諸課題を理論的に探究した書である。著者曰く、アクションリサーチとは、進行中の実践（アクション）の中（イン）に研究（リサーチ）という異物を侵入させることである。本書は、こうした性質を有するアクションリサーチが、集合体や社会のベターメント（改善・改革）をもたらすという研究目的の実現にむけて検討すべき諸課題を取り上げている。

一点目は、調査対象者と調査者の関わりである。アクションリサーチでは、実践に携わる当事者と研究者とが共同当事者として関与する。著者が問題事例として挙げているのは、行政や専門家が関与すればするほど地域住民が主体性を喪失させていくことであった。こうした状況に対し、「個別避難訓練タイムトライアル」と名付けられたアクションリサーチを通じて地域住民の主体性が回復されるとともに、自治体職員や研究者が観察される対象者として問い直されるという自らの経験を紹介している。

二点目は時間である。アクションリサーチは、よき未来へと向かう一連の時間的推移を仮定する。著者がここで問うているのは、被災者の「主体的な時間」において、何が既定なものとされ、何が未定なものとされているのかであり、この既定性と未定性のかじ取りをどうするかが重要な課題だという。たとえば、ある行為の選択を人々に促すには、「未来は必ずこうなる」という既定性の論理による媒介が必要である。反対に、災害発生後にそれが起こる前を振り返らせる際、未定性を持ち込むことにも一定の意義がある。それは、その災害が「まだ」起こっていないと仮定して語りを紡ぐように促すことであるが、そのような働きかけは、他にも対処の仕方があったはずだという後悔の念を生み出す



アクションリサーチ・イン・アクション

共同当事者・時間・データ

矢守克也 著

新曜社
2018年
A5判, 248頁
2,800円+税

ものの、その一方で、災害が起こる前の時間をかけがえのないものとして浮上させ、これによってより本質的なベターメントの実現に向かう可能性を秘めていると著者は指摘する。

三点目はデータについてである。ここで著者は、アクションリサーチにおけるデータの性質や、データの見方について論じている。代表的なデータは、共同当事者がデータを共同生産し、共同活用

する「コ・プロデュース」のデータである。しかし、著者はそれ以外のデータであっても、これにむける見方を再検討することの重要性を強調する。ここで繰り返し登場するのが「実存的意味」という概念であり、データが解き明かそうとする社会構造の実存的意味や、調査の回答に込められた実存的意味を問う必要性が指摘されている。また、これらの実存的意味を探るうえで、質的データと量的データの相補的關係や、量的データに質的な分析を加味することの意義につ

いても考察している。

実際に現場に出向き、何らかの状況の改善を志向する研究者であれば誰もが出会う難問に、著者は真正面から向き合い、「実践的に思考し、理論的に行動する」姿を示してくれている。評者は、とくに時間を扱った第Ⅱ部に刺激を受けた。著者は現場のベターメントのために、対象者の「主体的な時間」にどう働きかけるかを考慮して、研究的なアクションを起こすことの必要性を論じている。ここで示されているのは、現場の改善にむけた共同当事者であるという著者の立ち位置である。対象者がどういう時間を生き、それにどう働きかけるのかを考えて現場に入ることを求めている。本書を通じて、社会調査における、こうした繊細で鋭敏な感覚の重要性に改めて気づかされた。